

白水社

世界の文学

ホルヘ・ルイス・ボルヘス
土岐恒二訳

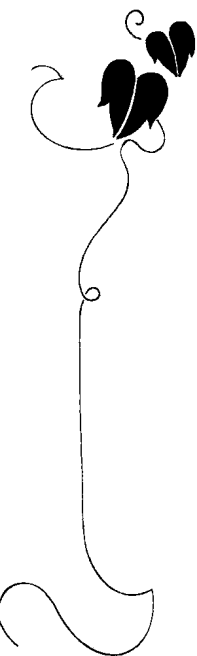
不死の人



El Aleph

ルヘ・ルイス・ホルヘス
岐垣二訳

死の人



白水社 世界の文学
不死の人

定価 一三〇〇円

訳者略歴
一九三五年生

一九六三年東京都立大学大学院修了

イギリス文学専攻

東京都立大助教授

主要訳書

エドマンド・ウィルソン

「アクセルの城」

フリオ・コルターサル

「石蔵り遊び」

一九八〇年一〇月三〇日印刷
一九八〇年二月七日発行

訳者 ① 土岐 恒二

発行者 中 森 季 雄

印刷者 田 中 昭 三

発行所 株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四
電話 営業部〇三(三三)七八一一
編集部〇三(三三)七八二一
振替 東京 九一三三二二八
郵便番号 一〇一

理想社印刷・加瀬製本

(分) 0397 (製) 77320 (出) 6911

目次

不死の人	5
死んだ男	37
神学者たち	49
戦士と囚われの女の物語	67
タデオ・イシドロ・クルスの生涯	77
エンマ・ツンツ	85
アステリオーンの家	97
もうひとつの死	103
ドイツ鎮魂曲	117
アヴェロエスの探求	131

	アベンハカーン・エル・ボハリー	おのれの迷宮にて死す	177
		ふたりの王とふたつの迷宮	195
	期待		197
	敷居の上の男		205
	アレフ		217
	エピローグ		247
解説			251
		神の書跡	167
		ザーヒル	149

不死の人

ソロモンは言ふ、「日の下には新しきものあらざるなり。」それ故プラトンの想像せし如く、「すべての知識は追憶にほかならず。」故にソロモンもまた説を述べて言ふ。「すべて新奇なるものは忘却にほかならず」と。

フランシス・ペイコン『エッセイズ』五十八

一九二九年六月初めのロンドンで、スミルナの好古家ヨセフ・カルタフィルスなる者が、ポープの『イリアッド』の小型四つ折り版（一七一五—一七二〇年刊）六巻本をリュサンジュ公女の高覧に供した。公女はそれをお買い上げになった。ふたりは二、三言葉をかわした。公女の語るところによれば、そのものは疲れて土色の顔をし、目は灰色で髭は白く、

妙につかみどころのない容貌の男だったという。彼は数か国語を流暢に、しかもでたらめにしゃべった。またたくうちに、彼の言葉はフランス語から英語に変わり、英語からこんどはサロニカのスペイン語とマカオのポルトガル語の混じりあった謎のような言葉に変わってゆくのだった。十月になって、公女はゼウス号の船客から、カルタフィルスがスミルナへ帰る途中、海上で死に、イオス島に埋葬されたという話をお聞きになった。公女は例の『イリアッド』の最終巻に次のような原稿がはさまれてあるのを発見された。

原文はラテン語法の頻出する英語で書かれている。ここに読者が読まれるのはその逐語訳である。

I

わたしが記憶しているかぎりでは、わたしの試練はテーベ百門ヘカトンピュロスの大都のとある庭園ではじまった。ディオクレティアヌス帝の御代みよのことである。わたしはそれより以前にエジブ

トで起こった戦争に出征し（なにも武勲はあげなかったが）、紅海沿岸のペレニーキスに駐屯していたローマ軍団の司令官になっていた。熱病と呪術が、けなげにも剣をとろうとした多くの男たちを倒していった。マウレタニア人が征服された。それまで反乱都市軍に占められていた国土が、永久に地下の神々に捧げられた。アレクサンドレイアも敗れて、むなしくカエサルの慈悲を乞うた。一年もたたないうちに、ローマ軍は勝利をおさめたが、わたしには、軍神マルスの顔を瞥見べっけんすることもなかなかできなかった。その不満がわたしにはつらかった。おそらくそのためであろう、わたしが恐ろしい広漠たる砂漠のかたに不死の人びとの住む秘密の都を発見しようとあえて望んだのは。

わたしの試練は、すでに述べたように、テーベのある庭園ではじまった。あの夜、わたしは一晚じゅうまんじりとしなかった。なにものかがわたしの心中で争っていたからである。わたしは夜の明ける少し前に起きた。奴隷たちはまだ眠っていて、月は果てしなく広がる砂漠と同じ色をしていた。ひとりの疲れきった血まみれの騎手が東方からやってきた。わたしの数歩手前で、彼は馬からすべり落ちた。かすかな、執拗しつとな声で、彼はわたしにテーベの城壁を洗っている河の名前をラテン語でたずねた。それは天より流れ出るアイ

ギブトスの河だ、とわたしは返事をしてやった。「わたしの探している河は別のものだ」と彼は悲しげに答えた。「人間から死を洗い浄める秘密の河は。」黒い血が彼の胸から噴き出した。彼の故郷はガンジス河の向こう岸の山岳地方だということであったが、そのあたりでは、そこより西方へ世界の果てまで旅する者は永生を約束する水の流れている河にたどり着く、ということが言い習わされているらしい。さらに彼の語るところによれば、その河の対岸には、稜堡や円形劇場や神殿が数多くある不死の人びとの都が凝然とそびえ立っているという。夜の明ける前に彼は息をひきとったが、わたしはその都とその河を発見しようとした。死刑執行人に尋問されて、いく人かのマウレタニア人の俘虜がその旅人の物語の真実であることを保証した。ある者は、人間が不老不死の長寿を保つ地の果ての仙境を思いだした。またなかには、その住人が一世紀も生きながらえているというパクトルス河の源流の山嶺を思いだす者もあった。ローマでわたしが対話した哲学者たちは、人間の生命を延ばすことはその苦悩をひき延ばし、死をふやすことであると考えていた。かつてわたしがほんとうに不死の人びとの都を信じていたのかどうかはわからない。ただ、あのときはそれを発見することだけで充分だったのだと思う。ガエトゥリアの総督フラウ

イウスは、この企てのために二百人の兵士をわたしにつけてくれた。わたしはさらに傭兵を募ったが、この連中は道を知っていると云ったくせに、まっさきに逃亡したのだった。

その後に起こったさまざまな事件は、わたしたちの旅の第一日の記憶を解明しがたいものにゆがめてしまった。わたしたちはアルシノエを出発して、焼けるような砂漠にはいつていった。蛇をむさぼり食い、言葉のやりとりということを知らないトログロデュタエ人の国、妻を共有し、ライオンを常食とするガラマンテス族の国、タルタロスだけを崇拜するアウギラ族の国を、つぎつぎと通過した。そのほかにもわたしたちは、疲労困憊しながら、砂の黒い砂漠や、昼間の熱気が堪えがたいために夜の時間を盗んで旅をしなければならぬ砂漠を進んだ。はるか遠くから、わたしは大西洋にその名をあたえている山を望見した。その山腹には毒を消す灯台草が生えている。頂上にはサテュルスという、残忍で粗野な、淫らな民が住んでいる。大地がこのような怪物の母となっているこれらの野蛮な地方が、その内部にあの有名な都を隠し持っているということは、わたしたちすべてにとって、想像しがたいことのように思われた。それでも前進をつづけた。引きかえすことは恥辱であった。少数の無謀な兵士たちは月に顔をさらしたまま眠り、熱病に全身が燃えた。

また他の者たちは、水槽の腐った水を飲んで狂氣と死に追いやられた。やがて逃亡がはじまり、すぐつづいて反乱が起こった。わたしはそれを鎮圧するために苛酷な手段をも辞さなかった。わたしは公平に対処した。しかし、百人隊長の警告で、わたしを殺害しようという暴動が（わたしが彼らのひとり）を磔^{はりつけ}にしたことに対する復讐として、熱心に計画されていることを知ったのである。わたしは自分に忠実な少数の兵士とともに幕舎を脱出した。砂漠のなかで、はげしい砂嵐と広漠たる夜にまぎれて、わたしは彼らを見失った。クレタ人の矢がわたしに傷を負わせた。わたしは水を見つけることができず、幾日もさまよい歩いた。それともあれは、太陽のために、渴きのために、あるいは渴きの恐怖のために、幾倍にもひきのばされた長い長い一日であったのだろうか。わたしは馬の脚の向くにまかせた。暁の光のなかで、遠方にピラミッドと塔がいくつも倒立しているのが見えた。いだだしい気持ちで、わたしはひとつのちんまりした清楚な迷宮の夢をみていた。その中央に水甕^{みずがめ}がひとつあった。わたしの手はいまにもそれに触れそうだったし、わたしの目は確かにそれを見ていたが、迷路があまりにも複雑に入り組んでいたので、わたしにはその甕を手取るまえに自分が死んでしまうだろうということがわかっていた。

II

やっとのことでこの悪夢から逃れ出たとき、わたしは両手を縛られて、ある山の急な斜面に浅く掘りこまれた、ふつうの墓穴くらいの大ささの、細長い石窟のなかに横たわっていた。その石の壁は湿り気をおび、人間の努力というよりは時間によってつるつるにみぎきあげられていた。わたしは胸のなかに痛いような鼓動を感じ、渴きに身を焼かれるのを感じた。わたしは外を見、弱々しく叫んでみた。山の麓には、土砂の澱んだどす黒いひとすじの流れが音もなく伸び、その対岸に（落日を浴びてか曙光を浴びてか）まごうことない不死の人びとの都が、燦然と輝いていた。わたしは城壁を、アーチを、正面を、広場を見た。基底部は石の台地だった。わたしが入れられている石窟に似た大小さまざまな石窟が、山腹や谷間に無数に穿たれていた。砂の中にはあまり深くない坑が、いくつもあった。それらの穴から（そして石窟から）、ねずみ色の皮膚をした鬚もじやの裸の人間たちが現

われてきた。わたしは彼らの正体をつかんだように思った。彼らはアラビア湾沿岸やエチオピアの洞穴^{ほらな}に出没するあの野獣のようなトログロデュータエ人に属しているのだ。彼らが言葉というものを知らず、また蛇をむさぼり食うということも、べつだん驚くにはあたらないわけだ。

堪えがたい喉^{のど}の渇きがわたしを捨て鉢な気持ちにした。自分のいる位置を砂地から三十歩ばかりのところで目算すると、わたしは目を閉じ、後ろ手に縛られたまま、われとわが身を山の下に投じた。わたしは血みどろの顔をどす黒い水につっこみ、獣のように飲んだ。ふたたび眠りと譫妄^{せんもう}のなかにふみ迷うまえに、わたしは不可解にもギリシア語の一節を繰り返した。「アイセーポスの黒き河水を飲みしゼレイアの富めるトロイア人たち……」

どれだけの日と夜が、わたしの頭上で回ったことであろうか。痛むからだで、ふたたび害^{あたふた}のかげに戻ることもかなわず、見知らぬ砂の上に、裸形のまま、わたしは月と太陽がわが身の不幸な運命をもてあそぶままになっていた。未開な状態にある幼稚なトログロデュータエ人たちは、わたしが生きながらえようにも死のうにも、ほどこす術^{すべ}を知らなかった。むなしくわたしは彼らに殺してくれと乞うた。ある日、わたしは燧石^{ろうちいし}の鋭利な角で、わた

しを縛っていた綱を断ち切った。また別の日、わたしは起きあがって、はじめて乞うことが（あるいは盗むことが）できた——ローマの軍団司令官ともあろうこのわたし、マルクス・フラミニウス・ルーフスが——あの忌まわし蛇の肉のわけまえを。

不死の人びとを見、超人間的な都に触れたいという渴望が、わたしをほとんど眠らせなかった。あたかもそうしたわたしの意図を察したかのように、トログロデュタエ人たちもまた眠らなかった。はじめ、わたしは彼らがわたしを監視しているのだろうと推測していたが、やがて、犬たちがそうなることがあるように、彼らもわたしの不安に感染してしまったのだらうと考えるようになった。わたしはこの野蛮人の村を立ち去るために、もっとも公然たる時間、つまり彼らのほとんどすべてが岩の割れ目や坑あなから現われて、決して目にするのではないはるかな西方を鑽仰さんぎょうする、あの夕日の傾く刻限を選んだ。わたしは、神の加護を嘆願するためというよりも、ちゃんとした言葉というものを口にするることによってこれら部族の者どもを驚かすために、大声で祈りをささげた。わたしは土砂が水勢を鈍くしているあの流れを渡り、あの都のほうへ向かった。あわてて二、三の者がわたしについてきた。彼らは（同じ種族の他の者たちと同様）ちっぽけな背丈をしていて、わたしに

恐怖心をではなく嫌悪の情をもよおせた。わたしは不規則な形の窪地をいくつか迂回しなければならなかったが、それらは石切り場のようにわたしには思われた。あの都の壮麗さに眩惑されて、わたしはそれがすぐ近くにあるものと思いこんでいたが、ようやく真夜中ごろになって、黄色い砂に偶像のような姿を倒立させているその城壁の黒い影をわたしは踏むことができた。一種神聖な犯すべからざる恐怖感がわたしを引きとめた。新奇なものと砂漠とは、人間にとってじつに忌まわしいものである。わたしは、ひとりのトログロデュータエ人が最後までついてきてくれたことがうれしかった。わたしは目を閉じて（眠らずに）輝く日の出を待った。

前にも言ったように、この都は石の台地の上に築かれていた。高い崖にも比すべきこの台地は、城壁に劣らず登攀が困難であった。通路を求めてわたしはいたずらに疲労をかさねた。黒い柱脚はいささかの凹凸もみせず、のっぺりと続く壁は、一つとしてはいるべき城門を持たないかのようなであった。強烈な日射しのために、わたしは洞穴のなかに身を隠さざるをえなかった。その洞穴の奥にひとつの豎坑があり、その豎坑には階段があつて下の暗闇のほうに沈んでいた。そこを降りて、雑然とした穢らしい地下道をとおり抜けると、